

地中海

MARE MEDITERRANEUM

2022. 4



令和4年4月1日発行(毎月1回1日発行)第70巻第4号

No.767

創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生史的なものだ。別ないかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しました北上した、すべての未開なもの同化してきただ大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地 中 海

一〇二三年 四月号 (通巻七六七号)

◇ 今月の二十首詠 …… みちのくに生く

上林節江 2

■ 作 品 A

福田庸子・船田清子他

林 清江他

浜名結衣他

藤井君康他

片山幸子他

木村恵子・紺野紘史

菅野順子・丸山哲史

田土成彦

香川進の生きものの歌

42

本田良一

37

私と短歌との出会い (236)

15

◆ 『特集』 写真・歌合わせ —— 【責任編集】 田土成彦

写真提供: 田土成彦・もりやまきょうこ

遊覧寄港 <セビア色の写真>

遠藤真理子

シルクロード・カフェ —— 【責任編集】 木村文子

44

■ 歌壇月旦
新春鼎談から

西堤啓子

■ 二月号作品批評

A …… 檜垣美保子・河野繁子

B …… 近藤栄昭・上林節江

C …… 松浦禎子・箕浦勤

オリーブ集 …… 坂上直美

今月の二人・作品評

最近の歌誌より

〔編集部〕

久我田鶴子

65 36

久我田鶴子

〔編集部〕

66 66

47

みちのくに生く

上林 節江

横なぐりの雪に小暗くけむる町寡黙に歩むみちのくびとは
 荒荒としけに嵐とを繰り返す海を見つめて越えていく冬
 侵略の戦火いくたび田村麻呂を頼朝をもまたわれ敬^{うやま}わず
 篠火をかきむしるさまに鳴る琵琶の栄枯盛衰身もだえて聴く
 しち、はち、く 上へ伸びゆく花の房しづかなれどもどっしりと橡
 スイングし飛ぶ鳥影にときめきぬ命の像^{かたち}と思ひは溢れ
 足の下に火を噴く竜は眠りおれよ藏王御釜のきょうのパノラマ
 北国に命はあふれ軒下に狂えることく蚊柱の立つ

昭和二十一年生まれ。
 治の会に所属。
 歌集に「絆」「記憶の遺産」「花と濡れつつ」
 がある。

子らを連れ登りしことも遙かなりいま月山を染めて夕映え

競技場の芝生は黄金に燃え立ちぬ われにあろうか円熟のとき
わが肩を寄る辺となすかひらの枯れ葉がわれの塘に入る
ガラス窓に防寒シートを貼りていく心の寒さは防げぬとてても
みちのくに母とも流れる北上川を遡上し瞬りし悲しみのあり
何をもて復興と言う黒山の汚染土バッグと隣りて眠る

不明者はいまだ二千と五百余人遺骨さがしのつづく十年

お帰り／晴れ着をきせてやるように海へと流すマンサクの花

青くさいが心惹かれる「HOPE」の語 希望がなくて何の人生
現代風に洒落たフレーズは身に付かず涙ぐみつつ詠みゆくわれに
あるがままに生きゆく道にまた一人出会いはありて学び広がる
雪の湿り消えてコブシの甘き香よ清浄としてみちのくは春

作品 A

福 田 康 子

軽 石

・今

漂ひて海渡りくる輕石と火山つながる列島の弧は
男体山の麓の校庭に競ひつつ輕石拾ふ六十年前
子らの手に拾ふ輕石尖りあり運動会前の山の校舎に
お菜漬けと村人は呼ぶ北信濃の師走の味をはるか恋ひゆく
小走りに廊下ゆく慈母の脚遠き記憶となりゆくらむか
風にゆれ天に向かへり裸木の梢に見つけし今年の力
春を呼ぶ節分草のましろさを長く愛でにし人を忘れず

船 田 清 子

虎 落 笛

・天

虎落笛ヒリ・ピリ・ピューと何嘆くコロナの寒空耐へずと泣くや
赤き水尽きなば餌あさを求めつゝ大移動するフラミンゴの群れ
フラミンゴの長脛赤き脚元をチヨコチヨコ着きゆく雛たち 必死
餌とするプランクトンの紅色が純白の羽毛を染め上ぐらしも
はるかなるトンガの島より日本へと太平洋をツッ切る津波
マリアナにガダルカナルと戦中の激戦地経て寄り来し津波
地核深くマグマは人類へ怒れるや地球のあちこち噴火あい次ぐ

藤 田 美 智 子

徒長枝

・新

言つてしまつてよかつたものか着けきたるマスクを外し息を吸ひたり
果たされぬままの約束思ふ夜を積みたる雪のかたまりてゆく
凍る夜にひときは光るシリウスが裸木の細き枝をふるはす
それぞれの枝がみづからを主張して冬の櫻は大きさを増す
あきらめるほかなき縁と思ひつつ冬の林檎をしやりしやりと食む
二つ三つに分かれゆく枝 戻らざる縁あることを今は肯ふ
凍て空を指す徒長枝の赤赤と やんちやな子らがいとほしくなる

藤 森 巳 行

クロスワード

・銀

クロスワード全問正解我が頭まだまだ若いと独り微笑む
クロスワードパズルの答はかんざらし燃下ろし吹くふる里思ひぬ
雪がふる金子みすゞの雪がふる街にふる雪泥になりゆく
我が恋はいくつあつたか知つてゐるかい南天の実に問ひかけてみる
ウイルスの感染状況第六波コロナに慣れて恐れなし
ウイルスが歴史を変へるパンデミック負けてはならぬ主役の人類
公園のベンチに坐り傷ついた心温めぬ冬の日差しに

萩 葉子 柚子

・銀

浜谷久子七草

・地

娘がひとつ買ひきし柚子に温まる手持ちの柚子は後日にまわし
花が咲いたわりには少なかつた果実 島にもつかれグレープフルーツ
せりなずな七草がゆを大鍋に作り家族の健康祈る
テーブルに七草の鍋でんと置き木のへらまわし熱熱かこむ
青森と高知のおみやげいただきぬ隣家の若い家族の帰省
「ホームに入ったのよ」会えないままに更に遠く
所作少し不自由なつたと決断は神経痛のことも話して

白子れい

朝のひかり

・洛

歩行補助機たよりて疏水へ出かかるも流れあらざり堰かれていたり
年の瀬の迫りきたりて水堰かれ底には濁れる水たまりいる
流れなき疏水は底に水をため落ち葉と苔におおわれいたり
堰かれいる疏水を訪うも驚の居す朝のよろこび一つ失う
水底にたまりいる水吹く風に上へ上へと逆流なしおり
新しき年のはじまり疏水には背黒せきれい敷羽とび交う
蹲る日々はやめたり新しき朝のひかりに大き息せん

ばばりょうこ

寿ぎ

・鹿

二〇二一年の歌会初めのうた垣を「メルヘン」にて発足 寿ぎいます
これよりは更にあやす言の葉は紡ぎ織がれていくことでしよう
あ 早やもちさき雷をつかせたる梅を見上げる新年の朝
姉もどきに「ハイ、お年玉」と今もなお妹もどきの吾のおしょうがつ
なからいは他人なれどもこのふしき前世にて姉妹と互みに納得
さきわいとしこだきいたる人生をおろがみていたる すいもからいも
餅をつく杵の音絶えて久しうり睡蓮「花」とメタカの住処

檜垣美保子

日曜日

・昴

のぼりゆくひとりの靴跡雪の上にのこされておりまた雪が降る
歳晩の雪の谷より連れもどり窓辺にかかる弓形の枝
風のなく明るきひかりの日曜日めじるの夫婦が小枝に揺れて
すがたなきトランペット奏者老年のおとこか丘の木立のむこう
こんな日がむかしあつたよ繰り返しトランペットの「星に願いを」
亡國の亡國のと声はこだましてビル街を黒き街宣車行く
パソコンの画面の間に映りこむわが肩ごしの深紅のタリア

七草の粥のまみどり翡翠色新しい年の染め付けをする
子の転勤決まり要件押し寄せる住居学校新年度まぢか
みたり子の転入学の方向も住居確保も遠隔操作で
子らは子で孫は孫らでいく時の来て十三年の幸振りかえる
祖父母の手離れて踏み出だす三人の孫鍵っ子の行く道思う
これからはそれぞれひとり鍵っ子のランドセルと行く祖父母の祈り
子の二人の関東住まいにわれら終の住処移すを冗談交じりに

牧 雄彦 岬

・大

万葉の岬に立ちて見る瀬戸の海面はかがやきただ風の音
風に乗り人ごゑ聞こゆとほつ世の人の声かと耳すましる
秋の日を浴びて椿の葉がひかる万葉岬に人影失せて
あああれが鳴島といふ小さき島赤人が詠みし瀬戸に鎮座す
波のなき湾に浮く牡蠣養殖のあまたの筏うごくともなし
人知れず咲きたる小さき黄の菊は瀬戸の風受けひねもすを搖る
日は西に傾きて島を照らしるる岬に別れを告ぐる時はや

松浦禎子 廊下 羊

「お前の年取った姿を見たかった」妻に残して逝き人あり
足柄の山で会いたし金時とすまいを取りし熊の子孫に
大雪に「外に出るな」とのメールあり風天のわれを戒むるため
コロナ禍の自粛中なるバースデイひそかに祝う三百ミリ缶
十四歳は同級生を刺ししという学舎の廊下血をかなしめり
日蓮の辻説法はこのあたり比企家一門のたましいの上
「他を先に、己れは後に」と鍛えたる御祖父ありこそ岡深

松瀬トヨ子 タヤケコヤケ 沖

公園の桜落ち葉の秋色を踏みしめ歩くタヤケコヤケ

配偶者の有無を問われ無を囁むひと月前に夫を逝かせて
畑の隅に冬瓜の青実太りゆく薄の枯れ葉しとねとなして

十六夜の月に招かれ白々と夏の夕べの夕顔の花

米寿迎え一日一日の過ぎ行きに亡き母の生九十八年

せせらぎの音と聞こゆるしとしと降る秋雨にいつしか寝入る
紅型の風呂敷広げ遠き日の母の手仕事針山の針

松永智子 飛翔

・嵐

呼びよせてひとはのこしぬどんな場にありても飛翔を終なることは
飛翔の一語をのこし逝きしひことばのひびきいまにあたらし
「飛翔」とはかなしきことば終の日のきみのことばのきれぎれのこと
父母居ます高天原か夫居ます極楽浄土か夜ふけにおもふ
かぎりなき寂寥されどんげんのをはりにちかき影ならむあはし
待つとなく待つといふにはあらずしてさりながらの声いまだもとほし
音絶えし十階ビルの闇の底きくひとの声とぼくなりゆく

三浦好博 風の子 鋼

鴉らも我が悪相を見つめをり睨み合ひしがつひに勝ちたり
世の不条理言ひ出す友を諾へと石に石の影木には木の影
人生はさういふものよと子らに言ふとき大部分偽りてゐる
喜ぶべき事のひとつか言はれる「あなたはいつも顔が笑つてゐる」
夕つ陽に黄金の落葉唐松のふたりに降りし記憶にも降る
甘酒の発酵の匂ひしてきたり老いの幸せはこれ位で良し
今は北明日は南に向きゆくか風の子を生み回る風車は

宮本靖彦 刀根山坂 凌

雪しまく清荒神初詣でコロナに負けぬ人ぞくぞくと

コロナ禍に家族付き来ぬ初詣でおでんに熱爛今年明けたり

稻づくり箕輪池また螢池老い鴨浮かべ静かにねむる

歩む間に夕晴れば去り三日月のかかる我が街今は故里

能勢街道刀根山坂と名の知れし難所でありしを今吾の住む
押し人夫たむろしし能勢街道の刀根山坂とは我が家あたりと
体操を了へ眺むる中空残月の淡く木蓮苔ふくらむ

三好聖三

雪平鍋

・伊

もとむらしげと

蝶梅

・そ

カーテンの穴に嵌つて抜けられぬ猫の足搔きに始まる朝は
一帯は霜の烟となるものを遠近おおきモグラ塚たつ
どんぶりに移すことなく食べている雪平鍋の拉麺が美味
パソコンへわが手へ小便吹き付けて一気に猫は逃げてゆきたり
「出来事」へ挙って走る気味悪さ霜降る土へ鍬を打ちたり
海に立つ二重の虹をくぐりぬけ港へ帰る漁船ひとつある
つん読の街路に迷う昼日中マルドロールの声があるいは

御代田澄江

行く年來る年

・茨

病院の連絡洩れにて若き女性患者入院医療受けられず自宅死
敵基地攻撃能力とは何ぞ戦争準備に金を使ふな今年の漢字
賜ひたる柚子を浮かべて入る湯よ頬に寄り来て友か囁く
イタリアの世界遺産の旅映像桑の木を招福の木と吾庭にも生ふ
口開き雪を舐めむと舌を出す童に声出し笑ひ笑ひ納めぬ
清水の舞台ゆ吾の飛び下りる初夢身体宙に留まり地に足着かぬ
頂きし賀状十七枚中に宝あり息子よりの一枚に切手シート当選

茂木斌

干支は巡る

・埼

ハヤブサの勝れし羽もおとろへに西への空ももはやかなはず
やや痛むヒザに登りし日和田山眼下に見たる巾着田もはるか
一年を盛り上げくれし栄一の大河ドラマは義時へ飛ぶ
禍は神の説めと言ふ人のありてコロナの世のなほ続く
「わざはひも三年置けば用に立つ」古諺にあれどコロナまつびら
還暦を過ぎて干支のふためぐりあと一年にてわが辰のくる
トイレしてそば屋を出れば喫煙のをぢさん 敏し「チャック開いてるよ

山下雅子

泡立草

・習

白石の神明社歌会終えのち鹿島茂と酒を飲みたり
大河原駅から夜の道十糠を歩き帰れりと後に話せり
米の値を擧げよと国会へ押し寄せテレビに大写しの風貌持てり
農に生くる苦しみの歌続けつつ祖の伝えし土耕せり
自分が植えし林檎樹の下に集わせて地中海宮城の歌会なせり
西に迫る蔵王連山眺め良き時にありき香川進歌碑
北の野に文化掲げて烈しかりき神道墓地群静けく深し
はるかなる記憶やらゆら泡立草思わぬ一本ゆうらり高し
手に負えぬ背高泡立草なりし黄の花房線路に沿いて
銀輪を連ねまぶしき線路際五十年経て金より銀に
人並の身動き遠のく日々なれど哀楽の思い深くなりゆく
ありのまま生きる日々なりのさばれる怠け心を抑えながらに
あわあわと空一面のグラデーション日輪沈むひとときの妙
さむざむと露をさらす櫻通り五十余年と共に生きたり

八乙女由朗

出合い

・柴

山野幸司 新米

・沖

横田敏子 立春

・福

新米の教師であつた木造の君の影なし鉄筋となる
ボプラ搖れ子らは群れたり校庭に時を刻みし我を捜しぬ

授業中山へと登る時もあり青年教師無鉄砲なだけ

言の葉が突き刺す時もあつたなど教師のたがをほどき陽を浴ぶ
あばら屋に一人住まいし邑子師の常夜灯浴びチャンブルー食う
松ヶ崎住宅一人邑子師の瞳は深く限りなく澄む
邑子師に習つて来てと児童言う新米教師スタート切れり

山本孟 雜兵

・大

吉永惟昭 チャンチャン

・熊

一月の手帳をめくる「寒かった。コロナまた来た。感染者増えた。」
軒先のビオラは風になぶられて雪に埋もれて瀕死の様に
びょうびょうと吹き荒れる風に耐えている庭の紅梅つぼみの固し
三度目のワクチン接種無事終えぬ 明日は立春良き春となれ
朝刊と郵便配達來たるのみ立春過ぐるも厳しき寒さ
ふきのとう頭ちょっとぴり覗かせて寒さに縮む心ふくらむ
籠る日に届きし娘よりの宅配便「花の歳時記」花あふれ咲く

雜兵は長距離徒步の戦場に着けば弓矢に射られ甲斐なし
中世の年々戦ふ雜兵に農民駆り出し昭和につながる
足軽の命は軽くあらざれど群衆の兵あつさり切らる
中世を皇國史觀に習ひたる小・中校の歴史墨塗る

やがてくる昭和百年までもう歴史を修正するやからる
過去帳の最も古き人又七戸半ば頃又右衛門明治の始め又四郎死す
短歌では食へぬも生涯止めざるは山之口蘿の詩にあこがれて

養学登志子 プロムシユエッド

・凌

磯田ひさ子 ストレス

・森

六十余名祝いてくれし米寿宴賜びひとつがこのチャンチャン
これをまあ「羽毛ベスト」と言うのかいどうも俺には品にそぐわぬ
この年まで羽織りしこともなき代物袖無しから引っかけてみるか
アイ染めの水玉模様ふるさとの温みも秘めし羽毛チャンチャン
かくしボッケまさぐりて知るチャンチャンコ脇下伝うゆりかこの温み
手放せぬことなりしなるチャンチャンコ寝起きに右腕既に入れて
この温み何処よりくる三ヶ年熱源わからず不可思議のまま

「また来たよ」という表情のプロムシユエッドさん九十四歳N響指揮する
老指揮者の至福の姿折りにも似てあたたかし総立ちの拍手
夜曲をきくように聴くブランームス指揮棒持たずささやきのよな
公園の日当りのよいすべり台左見右見して鶴がすべった
実千両白磁の壺にがばと入れお正月さまの依代となす
隠かなること願いつつこの年の出雲の餅にて雑煮を祝う

昨日の雀お元日には初雀一日粉殻掃く初等

松の内過ぎて娘と巡りたり草間彌生展 筱田桃紅展
三十年経てふたたびを連れ立ちぬ娘もわれも少し自由に
とび出し戦後の快挙 水玉の色の増幅 墨の炸裂
負けるとはつゆも思はず変異するコロナの進襲続くといへど
すいれん鉢に朱色の金魚うごき出す令和四年の春立つあした
一匹のはうがストレスなしといふ金魚屋の説いかにもいかにも
水槽に合はせて育つといふ金魚きゅうくつなるは苦しからむよ

梅本武義　この二年

・羊

遠き日の松籟聞きしをふと思う風に葉の舞う櫟の下に
四つ這いをすれば通れるけもの道冬に入りたる雜木林は
滑らせるつもりの丸木転げ落つ一瞬の油断損傷梅の木
カーテンを開ければ庭木に尉鶴里は白銀朝日が走る
出来悪き大根の辛味良しと言い妹一人持ち帰りたり
干し柿の固くなりしに懶ばる渋の抜けるが待てぬ空腹
風邪氣味さえ無きこの二年コロナ禍のマスク手洗い緊張ゆえか

大浪美雪

お焚上げ

・森

松と竹四方に立てて標を張り破魔矢・注連縄山をきづけり
焚上げ用正月飾りを運びくる軽トラックはダンプ仕様ぞ
結果をなしたる竹の倒れ伏し炎の中に爆ぜる音高し
炎より抜け出し天に昇れるは吉書なるかな　コロナよ鎮まれ
黒黒と目の入りたる達磨五体列なし侍つ焚上げらるるを
轟然と燃ゆる炎の影走り地軸傾き視界渦巻く
鎮まれる熾火の中よりまだ熱き注連縄の灰をいただき帰る

奥田陽子

広場のピアノ

・羊

ちさき手も節高の手もタッチして広場のピアノ高き音流る

ちさき指に弾きてゆくかな暗譜して臨みし顔の縮まれるを見る
おさな子を背に弾かんとする人に注がるる視線第一音を待ち
春の気の漂うかとも思うまで歌えるピアノ母なる人の
しなやかな細き指より立ちのぼる響きもつよし拍手のなかに
拍手鳴る中を退場してゆける若者髪の黄のいろの照り

流麗の音色にしばし佇める人ら去りゆき鎮もるピアノ

小野雅子　冬

・羊

葉を落とし伐採されて幹のみとなりて樽の太々と立つ
チーンソーの音の響きて次々と整へられてゆく冬の木々
さういへば聞いたことあることばかり関西人の歌集読みゆく
老年に身はなりたれど短歌つたなし珠玉の歌集よみて恥ぢつ
セーターを着てゐるのを見たことがないダウンの下はTシャツの子等
母の背を靴のサイズを追越して声も変はりてくる誕生日
樂しさが字からはみ出してゐるハガキ校外学習先よりとどく

神田鈴子

冬日がぬくし

・大

拭き上げし窓のガラスにふうはりと年の納めの風花が舞ふ
子の家に三たび迎ふる新春の朝のひかりはおだやかにして
感染の恐れいまだに消えぬ日を孫子集へるぬくもりにある
折をりのメール電話に支へられ生きゆくわれか冬日がぬくし
変りなき声に安堵す阪神淡路大震災の日けふ巡り来て
街中の小川に白き鷺が立つ暗緑色の流れの中に
鴨二羽の泳ぐ川面に驚一羽すつくと立てり孤高の姿に

菊地栄子

結末

・湾

一本の人參二五〇グラム本社へ送る歌稿の重さ

投函に昇格届けの一通も　星のまたたく正月二日

（しおり紐）付いてないからコンビニのレシート挟むまだ百ページ
ひとしきり降りくる雪の騒がしさ心ときめくこともあらなく
街灯を反射している凍てし道青き信号灯え返りたり
捲らんとしつ捲れぬ指の先　遂に湿らす口許に寄せ

懷かしくテレビの「哀愁」見入れども見るに耐えなき結末を切る

北山雪男　老いの舟路は

・伊

八階に住みて十年ときをりは上下左右にあはく影揺れ
四六時中留守番電話のわが家にてオレオレ息子は寄り付きませず
眼科経てひとまづ耳鼻科　病院の波間ただよふ老いの舟路は
またひとつ老人病と告げられて空元気にも歛ひとつ増え
とめどなく雪しまく夜は葛湯喫むおふたり様の無為のまどるに
孫の来る日曜の朝　ハゲに櫛入れて車の曲がる角見て
幸せになりしは猫か飼ひ主か言はずもがなの猫の命日

草刈十郎

燒芋

・世

冬ざれの野の枯れ芒に吹く風の音みな冬の寒さ連れくる
忘れもの探しに入れば次の間は人のぬくもりなき冬の夜
人間の欲望深し風もあり風もありて卒寿越えたり
コロナ禍にただワクチンを頼るのみわれの命の寒さを思ふ
お互ひの猫背を笑ひ老いしことまさまさと知る寒さなりけり
変りなく昨日も今日もマスクして生きてゐるぞと思ふ日々なり
焼芋をアツアツアツと大袈裟に吹いて叩いて冷ます炬燵に

國井節子

若草山

・春

河野繁子

雪被る

・雁

崖の縁歩みていたる四月ほど目に入らざりし鳥止まりおり
雪かむり苔ぶくらむ梅の木にツグミ消えゆき飛びたつを待つ
雪被る家々夕べの灯を点しいかなる団居つつみる窓
すこしずつ日常もどり対話なり聞けばティサービスの話ボソボソ
ながねんの無事故無違反の貸を受け免許返納子が持ち帰る
冷えしるき朝のパソコン嘘の出でからだ指先温めて待つ
かたちなき神よびとめて己が苦をくまなく委ね道の雪掃く

小林能子

チケット予約

・羊

合宿から直行東京初公演「東北ユース」にゆうこちやんもゐて
被災地に演奏つづける意味を問ふ「東北ユース」の勇氣といふもの
復興もなかばの福島熊本の「ユース」の演奏　TVに流る
のり越えて来し歳月に響きあふ懐かしき曲「戦場のクリスマス」
「東北ユース」東京公演再開の知らせに声上げうなづくばかり
二か月後のチケット予約ほんたうに行けるのか私にいま訊かないで

近藤栄昭

with

・虹

withといい安心させてあつちこち引き回される三回目がきた
赤錆が恐れの色と知る人がコロナに塗つておひやかしいる
寝起き前甘い夜明けに笑み沸きぬ半分死人を今朝も忘れて
使い捨てマスクの日常買いができた喜び感激はるか
断捨離に一時保留の偉人伝残りおりぬ　近づけずいる
君は不要世に首切りを言われるにしがみつきいる病院巡り
スマホ重くまぶたこすれて寝る時か明日を思える望みのありて

近藤芳仙

龍に遇ふ

・信

篠原まり子

初春

・羊

ローソクの形の塔をたしめて師走の京都空ひろげをり
上賀茂に別雷の神をたづねれば朱の楼門に護られ御座す
平安の貴族が禮なせしとふ「橋の小川」の水透きとほる
鳴き龍へたたきみる手の音に出で堂にかすかな響きをたてる
ふりむきて幾度見上ぐる龍の目か八方睨みに追ひかけられて
いくたびも龍にあひたり天龍寺にまた幻の龍淵みをり
遠近は残り紅葉の彩に染みうちしぐれゆく古都の坂道

坂上直美

年頭

・天

正月に百人一首とる習い絶えて久しや今年もまた
花札の絵柄を美しと思ひしが生真面目なる母眉をひそめき
医者の道途絶えしからと人を刺す十七の子よ汝の未来よ
大学に行かねば道は開けぬと歯を噛みしめし十八のころ
新しき手帳を購えり猫手帳楽しき年となるを願いて
わたくしの命の終わるその日まで能うかぎりは歌を詠まなん
わが思い千里を走れ虎の年冬の嵐は吹き荒ぶとも

坂出裕子

雲

・浴

山の辺を紅に染め太陽がいま昇りくる道を照らせり
一生静かに振り返れよと神様の賜はる時かコロナ禍の日は
みな人の遠くなりたりマスクして顔見することなく行き過ぐ
歌のあることのしあはせコロナ禍の日々を三十一文字に綴れる
電飾の色うつくしき駅のみち遠回りして眺めて帰る
ねむられぬ夜のテレビに「運命」を聴きたり神のプレゼントなり
水底に沈むがごとく浮かびる春待つ雲の白き漂ひ

歯切れ良きこうもりのテンボ歳月に押し流されてニユーハイヤーコンサート
大宰府は足遠くなり取り寄せの梅ヶ枝餅を供えて新年
命日と同じくしたる父と母屠蘇交わしつ語りしは何
本箱にいつもやさしい椎名さん明け暮れに読む『一本の木』
この年も成さぬがままの断捨離か懐かしき物在りてこそ日日
ウオーキング冬陽の温もり人を恋う「岸辺の旅」を一日下さい
蝋梅の蕾ほろほろ落ち果てて凜と残るは千両の赤

柴田登志恵

よき日

・天

山越えに黒雲来たり病棟はたちまち真白き界へ入りゆく
絶食は四日目となり点滴も習慣化せり順応早し
倒るるまで疑はざれど平常が不調といふはかなりをかしい
じんはりとボディーブローが効いてきて緊急入院介護の長し
うすべにに変はる白鳥のかたち雲いのち新たに明日またまみえむ
病棟の狭間に鳩は低く鳴き窓のともし火消ゆるまでをり
点滴台押しつつ日の出見にゆきぬ今日はかならずよき日とならむ

鈴木結志

花祭り

・福

降誕会祝尊像に甘茶かけ平和尊び花祭り寿ぐ
花のある茶のある暮らし永存の生きの育み筆に手習う
はなにうたひとに詩起こす天象の春の情のかがよいに満つ
「天は星地は花人は夢」叔父の言葉尊びうた紡ぎゆく
拓士らの記念樹さくら百余年詩人歌人の筆起こし咲く
紅さやかしだれざくらの詩みのりか大地に届かんばかりに垂るる
長命水酌みてこころの華やぎに神気のちから得し思いなり

関根榮子　おめざ

・埼

昼夜より覚めて食みいるクッキーに幼日の祖母のおめざを恋えり
糸くすがついているよと笑いつつ祖母はおめざを枕より出す
帰り道に見上げていたるオリオン座ボケットののど飴さぐりつ
探しる星みつからずチカチカと視野を過ぎしは人工衛星
明星の輝き始め突然に「夕焼け小焼け」の放送流れ来
大量の水を使うは生物では人間のみと風呂の湯流す
いつ来るやその時のため大観に二百リットルの水を溜めおり

関根和美

一月三日

・埼

転院の車中にあるも自宅へと言わざる母よそれのさびしき
とうとつに別れは来んと許されてひととき母とふかく触れ合う
苦し気な息つきのもと有難うありがたいねと感謝のみ言う
痛むとこあるやと問うに首を振りよく眠れるし手も動くのと
三ヶ日すぎたらまたねと面会の予約したるに間に合わざりし
甲状腺腫瘍破裂を免れて死因は肺炎　すくいと医師は
たたかいの表情とかれ穏やかな顔に触れゆくまだぬくみある

高尾恭子

寒月

・大

もうひとの灯りをひとつひとつ消しボインセチアの葉は枯れゆけり
ろうそくを朝な夕なに献じましよう勝手に戒名つけて「めんね
面倒な男なりしが温和しくなつて夢にも訪ねてくれぬ
くすぐったからうが黙つて聞いていてあなたを偲ぶzoomのつとい
うつし世はむすんでひらいて霜焼けに赤くただれた両手をかさす
うつし世に背を蹴られて仰きみる寒月かたじけなきまで青し
留守電はときれときれの母のこえ雪が降つたよそれだけのこと

高津砂千子　つばき油

・風

地御前^{じごぜん}の港に迎う初日の出金色の帶牡蠣イカダまで
三滝寺のさくら並木の入り口に「さくらぼし」と小さき橋あり
葉ばたんと千両の実を供えられお地蔵様はほほえみおわす
ばらばらと散たばしる昼ひなかゆうるりとゆく手に受けながら
透きとおる小えびピンピン跳ねており思わず求む寒の店先
柿の実のぼづんと残るひと本に目がゆく寒き停車場にいて
あなうらにつけ油をつけて揉む話しかけつつ時かけて揉む

滝田靖子

カレンダー

・新

年末に掛けし北斎の赤富士のカレンダーまだめくつてゐない
幸先の良い一年にしようなど甘いな毎日残業ぢやないか
一時間かけて通勤する若きナースの夜道に雪降りつのる
ふらふらになるほど働く必要があるのか雪の夜道もう眠い
一本のペットボトルの珈琲をご褒美として今日も働く
真夜中のひとりの食事にも慣れて意図せぬ黙食かく味気なし
同居する母の気配のない夜中今日も静かなひとりの夕餉

竹下妙子

友と吾

・霧

柚を切る庖丁より発したるしづくたまゆら光となれり
枯葉つたひわたる冬山の淡きいなづま音なく消ゆる
鳥一羽うすあかり空飛翔せり声なきことく声あることく
ひとつづつまた一つづくれなるの熟しし柿を鳥食ひつくす
ひもすがら痛むわが足かはひつ冬の陽落ちし部屋に佇む
若くして逝きたる友の夢を見る若葉燃ゆる季節といふに
春嵐心の中に吹きくるな君の死さへも認めぬもの

田 土 成 彦 白 鷺

・ 宙

中 島 央 子

老い盛り

・ 森

張り詰めた翼は風を抱くやうに天より降る一羽白鷺
湯豆腐に馬路村産の柚子ポン酢たっぷりかけて今日の贅沢
キンドルの無料書籍のいく冊か多くは忘れ忘れては読む
鼻水と嚏三回これはもうオミクロンだと自己診断は

十三の喜八洲のばた餅王侯の氣分に薄茶を添へていただく

午後五時の壁面染むる太陽と黄昏の賛歌ともに歌はむ
夕茜少し潤りをともなへる巷の空にあはき半月

田 土 才 惠

山 焼

・ 宙

永 塚 節 子

歩 み

・ 銀

山頂のライトの合図しばしのち冬の花火に山焼きはじむ
打ち上げる冬の花火のしんしんと迫る靈気に春日野暮れて
空焦がし煙はのぼるおのずからきよまりゆかん八十路を前に
燃え盛る炎の中に焼かれゆく虫の命の幾千万も
山焼きに関わるひとの目に見えぬ數多の影を思いて戻る
やりたきこと叶えたきこと思いつつ八十路の坂をゆるゆるとゆく

玉 井 綾 子

怒 り

・ 羊

約束の時間に集まらないことは誰のせい矛先は空回り

吾が叱るべき人を彼が責めている、でも吾なり彼が怒ってるのは
夫に見る怒り方なり彼の気が鎮まるまで吾は何も喋らぬ

パソコンに向かう肩より上の気が見え彼に誰も話しかけない
キーボードを叩く音から血流の平時に戻るを知る並び席
退勤時はいつも通りの彼なれどその怒り吾を安眠させず
他人より怒りを生じる痛點がない欠陥をまた思う冬

となり家が更地となりて空をつく携帯基地の鉄塔が建つ
孫よりのメールに返信おぼつかず手引書片手のカンタンスマホ
電話すら音を拒否するカンタンスマホ〈失敗〉なんて云はれたくない
われよりも聞こえの悪き子を思ふ娘は本日六十五歳
酒粕を溶きて甘酒啜る夜半つまらない令和四年正月
九十歳の先はボーナスタイルとぞ老い盛りと言はば言ふべく
歯科眼瞼整形外科にマッサージ今日は日曜歌集が読める

ぶつりと途切る日まで書き送る秋の季語のあれやこれやを
吾がために残しゆきたる一句とも　喘ぎつとも今日の命や
四十九日の法要嘗みしと思の文ああ本當に行つてしまつた
おそろいの琵琶の形のアクリル宝物館に求めしかの日
日常は非日常へ入れ替わる前触れもなく音も立てずに
満州の荒野歩きし三歳児　なんのこれしきなんのこれしき
臘梅の樹下に立ちたくそろそろと次の角まで歩みを延ばす

仲 西 正 子

オミクロン株

・ 沖

日本本島米軍基地の周辺にオミクロン株拡がりてゆく
オミクロンの大和の基地の周辺に拡がりゆけば政府動きぬ
オミクロンは沖縄からと言ふならばお探りくださいその原点を
声高にオミクロン株は基地からの「染み出し」なりと沖縄の知事
國民の命と財産守るとぞこの島もまた領空の下
罹患者の数字をよみてコロナ禍の時は過ぎゆくのべらばうに
この黄色あたたかいねと四歳が摘みとりくれし冬のたんぽば

久我田鶴子

平日の昼

・羊

香川進の生きものの歌 42 田土 成彦

大寒の空のふかきへ伸びをして冬芽ひからす木蓮の木は
「あてなよる」を見る屋下がり大原や千鶴の手にするグラスの傾き

茶化しつつ笑かしくる[石橋や蓮司の隙より喉がくつくつ

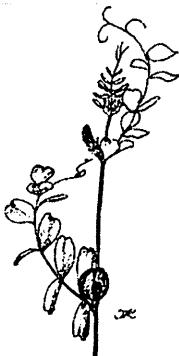
平日の昼るる夫を目の端に食卓にひろぐゲラと原稿

昼間から天ぶらを揚げ蕎麦をゆで在宅勤務のひとに供する

内陸の街へと移り棲むもありイソヒヨドリはツグミの仲間

富戸駅に見しを最後に幾十年こんなところにイソヒヨドリが

・蔽ひたる衣よりいづれば^{うは}反りし御足になけよ黒きこほろ
『氷原』より
さ



この歌は歌集の巻末に近く「鶯」という小見出しの中に出てくる。ただ十二首ある歌の中で鶯に関するような歌は不思議なことに一つもない。この一連は前田夕暮の臨終を詠つたもので時は昭和二六年四月二〇日のことである。享年六十九歳、今日では少し若死にという感じもあるが当時ではまあその死去を許容出来る範囲の年齢であったのかも知れない。宮松二、矢代東村なども同席していたようで、二十年近く師事した人の死を感じを押し殺して見つめている。冷徹という気はしないが、上の句の視点の据わり方は正直、並の人間の神経では出来ない。戦場で多くの死を見つめてきた人の肝の据わりようなのだろう。

ところで結句に「黒きこぼろぎ」が出てくるが蟋蟀の体色は平均的に黒から茶褐色という所で、現実には特に問題は無い。ただ「黒」のイメージはやはり凶事につながりこの小動物の出現が死という事態の確定を告げるような役割を果たしているようと思う。蟋蟀は大体七月下旬から十一月ぐらいまで鳴くようで四月二十日にはまず鳴くことはない。歌では「なけよ」となつており「鳴いた」わけではない。この場にあってあの独特の哀調のある鳴き声で師の御靈を見送つてほしいという作者の願望が込められているのだろう。